学会ウェブサイト：http://joha.jp　　2025 年 8 月 13 日

ＪＯＨＡニューズレター

第 48 号

日本オーラル・ヒストリー学会第 23 回大会（JOHA23）のご案内

日本オーラル・ヒストリー学会第 23 回大会(JOHA23)が 2025 年 9 月 12 日（金)・13 日（土)・14 日(日)に大阪大学にて開催されます。お誘い合わせのうえ、ふるってご参加ください。

※　本大会は**現地報告のみ**で開催いたします。オンラインでは開催いたしません。

※　12 日（金）はエクスカーションを予定しています。

【目次】

Ⅰ．日本オーラル・ヒストリー学会第 23 回大会

会長・開催校挨拶　・・・2

1.　参加申込について　・・・2

2.　大会プログラム　・・・4

3.　自由報告要旨　・・・9

4.　若手実践企画要旨　・・・16

Ⅱ．理事会報告

第 11 期臨時（2025 年 2 月 20 日）　・・・21

第 11 期第 5 回（2025 年 7 月 5 日）　・・・22

Ⅲ．シンポジウム・ワークショップ報告

JOHA・歴史工房やまとワークショップ・・23

Ⅳ．お知らせ

1.　IOHA のお知らせ　・・・25

2.　会員異動　・・・25

3.　2025 年度会費納入のお願い　・・・26

＊ニューズレター掲載のメールアドレスは、(at) 部分を@ に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

Ⅰ．日本オーラル・ヒストリー学会　第 23 回大会

Japan Oral History Association 23rd Annual Conference

《会長挨拶》

大変厳しい暑さが続いておりますが、皆様お元気でお過ごしでしょうか。今年度の大会は 9 月 13・14 日に大阪大学で開催します。今回は JOHA 初の試みとして、若手会員の皆さんに自分たちで大会企画を立ててもらいました。２日間にわたって５つのセッションを行います。若手ならではのパワフルなセッションが期待されます。また、大会前日のエクスカーションは魅力的な２つのコースを用意していただきました。多くの会員の皆様にお集まりいただき、交流を深めていきたいと考えております。ぜひご参加ください。

JOHA 会長　石川良子

《開催校挨拶》

このたび、大阪大学にて初めて日本オーラル・ヒストリー学会の大会を開催できますことを、光栄に存じます。開催校として会員の研究の発展と参加者の交流に尽くせるよう、努力します。開催にあたっては、大阪大学大学院人文学研究科にもご後援をいただくことができました。

第 23 回となる本大会では、20 以上の個別報告に加え、テーマセッションや若手の実践企画が数多く準備されていると聞きます。大会前日のエクスカーションでは、都市・大阪に刻まれた人びとの歴史を学び未来を展望するフィールドワークと食事会を準備しています。共に生きる場がどのように作られているのか、多くの方と訪れたく思います。大会初日の総会後には学内にて懇親会を予定しています。学会は旧交を温めるだけでなく、新たなつながりが生まれる場でもあると思いますので、こちらにもぜひ足をお運びください。

大阪・関西万博の開催期間中でもありますので、ご参加にあたっては、早めの宿の確保をお勧めします。キャンパス内は土曜日のみ、食堂が 11：30～14：00 空いているほかコンビニエンスストアが営業しています。日曜日にはどの店舗も営業していないので、各自で準備をしてください。Wi-fi は Eduroam が会場にてご利用いただけます。

それでは、会場で皆さまとお会いできることを、楽しみにしています。

開催校理事　安岡健一

開催日：2025 年 9 月 12 日（金）・13 日（土）・14 日(日)
　　12 日（金）はエクスカーションを予定
会場：大阪大学豊中キャンパス（〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町）https://www.osaka-u.ac.jp/ja/access/top
　　法経講義棟　https://www.sfs.osaka-u.ac.jp/user/danish/newstopics/osakaunivmap.PDF
主催：日本オーラル・ヒストリー学会
後援：大阪大学大学院人文学研究科

１． 参加申込について

＜エクスカーション＞

「大阪の歴史をたずねる＋いくの BBQ スカイパーク夕食会」

【コース①】旧真田山陸軍墓地　見学&レクチャー　（定員 20 名、先着順）

【コース②】猪飼野を歩く　見学＆レクチャー　（定員 15 名、先着順）

終了後、両コースが合流し、「いくの BBQ スカイパーク」にてバーベキュー（サムギョプサルセット）

参加費：5000 円（両コース同じ。食事代・簡単な飲み物、施設入館料などを含む）

参加費の支払い方法： peatix にて事前にチケットをご購入ください。

購入ページ： https://joha23excursion.peatix.com

購入期限：2025 年 9 月 4 日（木）18：00（コンビニ・ATM での支払いは 9 月 3 日まで）

（定員に達し次第、販売を終了します。）

＜大会＞

開催方法：対面のみ

参加費：一般 2000 円、学生その他 1000 円

※「その他」には年収 200 万円以下の方が該当します。

参加費の支払い方法： peatix にて事前にチケットをご購入ください。

購入ページ： https://joha23osaka.peatix.com

購入期限：2025 年 9 月 4 日（木）23：59（コンビニ・ATM での支払いは 9 月 3 日まで）

＜注意事項＞

- 支払いには以下の決済方法をお使いいただけます。
- クレジットカード（VISA、MasterCard、JCB、AMEX、Discover、Diners Club）
- コンビニ（Lawson、FamilyMart、Ministop、Daily Yamazaki、Seicomart、手数料 220 円は購入者負担）
- ATM（Pay-easy、ゆうちょ銀行、ジャパンネット銀行、楽天銀行、じぶん銀行）
- 会場受付にてチケット（スマホ画面または印刷したもの）をスタッフにご提示ください。
- 領収書は原則発行いたしません。利用明細書・引き落とし明細書・コンビニ発行の領収書・peatix 発行の領収データなどを領収書の代替としてご利用ください。
- 当日大会会場での受付はできませんのでご注意ください。
- 大会 1 日目終了後に懇親会を参加いたします。出席を希望される方は、peatix チケット購入時のアンケートに「参加する」とご回答ください。懇親会参加費（一般 5000 円、学生・その他 2000 円）は現地で徴収いたします。

＜自由報告・テーマセッション・若手実践企画へのお願い＞

◎自由報告へのお願い

1）自由報告は、報告 20 分・質疑応答 10 分（合計 30 分）で構成されています。

2）報告者へのお願い：報告資料は９月８日（月）までに下記２つのアドレスにお送りいただけると、大会参加者のみが閲覧できるようにします。

m747996@nifty.com, joha.secretariat@ml.rikkyo.ac.jp

事前にお送りいただいた方が会場配布資料を作成するかどうかは任意です。もし事前送付が間に合わない場合、50 部の印刷をお願いします。なお、会場にコピー機はありません。

◎テーマセッションへのお願い

１）テーマセッションは 110 分です。時間の範囲内で、報告・コメント・討論を行ってください。

2）報告資料のお願い：報告資料は９月８日（月）までに下記２つのアドレスにお送りいただけると、大会参加者のみが閲覧できるようにします。

m747996@nifty.com, joha.secretariat@ml.rikkyo.ac.jp

事前にお送りいただいた方が会場配布資料を作成するかどうかは任意です。もし事前送付が間に合わない場合、50 部の印刷をお願いします。なお、会場にコピー機はありません。

◎若手実践企画へのお願い

１）若手実践企画は 60 分です。時間の範囲内で、報告・コメント・討論などを行ってください。

2）報告資料のお願い：報告資料は９月８日（月）までに下記２つのアドレスにお送りいただけると、大会参加者のみが閲覧できるようにします。

m747996@nifty.com, joha.secretariat@ml.rikkyo.ac.jp

事前にお送りいただいた方が会場配布資料を作成するかどうかは任意です。もし事前送付が間に合わない場合、100 部の印刷をお願いします。なお、会場にコピー機はありません。

２． 大会プログラム

◆ 9 月 12 日（金） エクスカーション

大阪の歴史をたずねる＋いくの BBQ スカイパーク夕食会

【趣旨】今年の JOHA 大会エクスカーションでは、大阪のまち歩きと夕食会を行いたいと思います。大都市・大阪はさまざまな人が行きかい、暮らす場所でした。歴史を作ってきた人びとの残した痕跡を保存・継承する活動、新しく共に生きる場を作る活動に、触れてみませんか。参加者は下記の 2 つのコースのうち１つを選び、そのあと、大阪市生野区「いくのパーク」のバーベキュー施設で合流し、お食事（サムギョプサル）を食べながら歓談します。「いくのパーク」は多文化共生のまちづくり拠点として、多くの人が訪れています。ちなみに、バーベキュー場に生まれ変わったのは旧小学校の屋上のプールです！

エクスカーション参加費：5000 円（両コース同じ）

（食事代、簡単な飲みもの、施設入館料など含む）

コース①旧真田山陸軍墓地 見学＆レクチャー（定員 20 名）

大阪市天王寺区玉造に広がる旧真田山陸軍墓地。ここはいま市民が自由に散策する憩いの場ですが、同時にいまも戦争と軍隊の存在に起因して亡くなった多くの人びとを慰霊し追悼する場所でもあり、近代日本の軍隊と戦争を知ることのできる大事な史跡の一つです。私たちは、陸軍創設期以来の歴史をもち、しかも戦前、戦中の形をよく残す、この墓地に関する正しい認識が広く共有されること、史跡・文化財としての保存体制が確立されることを願って 2001 年からさまざまな活動を続けています。立ち並ぶ墓碑のひとつひとつの背景から見えてくるものを現地の空気とともにご体験ください。

NPO 法人「旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会」

日程　9 月 12 日(金)13:30～16:00
　　13:00～受付
13:30～14:30 旧真田山陸軍墓地についてのレクチャー
14:35～15:20 グループに分かれて墓地案内
15:25～15:45 地域の古老による空襲体験と戦後の話
15:45～16:00 質疑応答 15～20 分
　16:00～　　自由散策、移動

会場｜旧真田山陸軍墓地内集会所（大阪府大阪市天王寺区玉造本町 14-83）
墓地案内・レクチャー｜NPO 法人「旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会」

※やぶ蚊が出ますので長袖・長ズボンの着用と虫よけスプレー持参をお勧めします。

2025.3.20　「上町台地にある旧真田山陸軍墓地と積み重なったまちの記憶をツバメと旅する春」上演風景

2025. 6. 22　墓地風景

コース②　猪飼野を歩く　見学＆レクチャー（定員 15 名）

「猪飼野」は、いまでは地図に記載されていませんが、大阪市東成区と生野区にまたがる地域一帯を指す名前です。数多くの在日コリアンが集まり暮らした場として知られるこの地域に、在日コリアンと日本人の庶民が生きた様々な歴史の痕跡があります。このコースでは、同地出身の地域史家・足代健二郎氏を講師にお迎えし、地元の歴史を研究してきた足代さんの思い出を交えたまち歩きをします。2023 年に開館した大阪コリアタウン歴史資料館をたずねたのち、御幸森小学校跡地の多文化共生のまちづくり拠点「いくのパーク」も見学します。いくのパークでは施設を運営する多文化ふらっと事務局長の宋悟さんから地域の現在のお話を伺います。

日程　9 月 12 日（金）　13：30～16：30
13：00～　受付　集合場所　鶴橋駅中央改札口
13：30～　猪飼野まち歩き
14：30～　大阪コリアタウン歴史資料館　見学
15：30～　いくのパーク　見学

まち歩きレクチャー、語り手：足代健二郎氏（猪飼野探訪会）、宋悟氏（IKUNO・多文化ふらっと）

2023 年 6 月　コリアタウン歴史資料館

2023 年 7 月　いくの BBQ スカイパーク

◆ **9 月 13 日（土）、9 月 14 日（日）　大会**

大会 1 日目　2025/9/13（土）			
9:15-9:30	開会あいさつ（会長）・日程説明（研活）（会場 1　5 番講義室） → 各会場移動		
	会場 1（5 番講義室）	会場 2（4 番講義室）	会場 3（3 番講義室）
9:30-10:00	①中原逸郎	③久志隆子	⑧松原かおり
10:00-10:30	②ビヤンビラキララ	④謝花直美	⑨木村豊・那波泰輔
10:30-11:00	テーマセッション① 林貴哉 「フィールドワークを通した自己の変容」 （～12:20）	⑤猪岡叶英	⑩木川剛志
11:00-11:30		⑥宮崎嵩啓	⑪高橋泉
11:30-12:00		⑦亀井恭祐	⑫坪田＝中西美貴
12:00-13:10	昼休み（理事会）		
13:10-14:10	若手実践企画①「暴力の「あと」―沈黙の解釈をめぐって」 （4 番講義室）		
14:10-15:10	若手実践企画②「植民地主義と<わたし>」　4 番講義室		
15:10-15:20	（休憩）		
15:20-16:20	若手実践企画③「「ケアの実践」の可能性―オーラル・ヒストリー実践者同士による対話と回復の試み」　（4 番講義室）		
16:20-17:40	総会、奨励賞授賞式 （4 番講義室）		

17:40ー	別会場で懇親会

大会２日目　2025/9/14（日）			
	会場１（２番講義室）	会場２（４番講義室）	会場３（３番講義室）
9:30-10:00	⑬金成洙	⑭坂本知壽子	⑲大森貴弘
10:00-10:30	テーマセッション② 田沼幸子 「まだ見ぬ私を語る」 （～11:50）	⑮村中大樹	⑳朴洸弘
10:30-11:00		⑯竹原信也	㉑杉本雄一郎
11:00-11:30		⑰吉成哲平・三好恵真子	㉒敖夢玲
11:30-12:00		⑱大池真知子	㉓渡部春奈
12:00-13:00	昼休み（次期理事会）　（（経）第一演習室）		
13:00-14:00	若手実践企画④「いま、戦争と移動をどう語るか ―記憶の継承と現在性」　（５番講義室）		
14:00-15:00	若手実践企画⑤「わたしがアーカイブを作るとき／使うとき ―可能性・困難・権力を考える」　（５番講義室）		
15:00-16:10	若手実践企画　まとめ コメント　小林多寿子、休憩、意見交換　（５番講義室）		
16:10～	閉会挨拶（会長・開催校理事・次期会長あいさつ）（５番講義室）		

■ 9 月 13 日（土）

会場　大阪大学豊中キャンパス　法経講義棟

9:15　開会あいさつ（会長　石川良子）　会場１（5 番教室）
　　開催内容説明（研活　大門正克）
9:25　各会場へ移動
9:30～12:00　自由報告部会　１日目

● 会場１（５番講義室）
　司会：清水亮（慶応義塾大学）
中原逸郎「西洋音楽の受容：京都音楽会を中心に」
ビヤンビラ キララ「記述の客観性とは何か：在日スリランカ人 2 世のライフストーリーを例に」
【テーマセッション①】林貴哉ほか「フィールドワークを通した自己の変容：他者に出会う、当事者になる、当事者として語る」

● 会場２（４番講義室）

司会：椙本歩美（国際教養大学）、人見佐知子（近畿大学）

久志隆子「沖縄戦における中城村津覇の住民の体験：選択の違いによる体験の差」

謝花直美「沖縄戦下の沖縄島中南部の食糧問題：住民証言と戦場行政の視点から」

猪岡叶英「ある在阪沖縄出身者による祖先祭祀の継承と実践にみる語りなおし」

宮崎嵩啓「宮城県石巻市「私設平和資料館」の歴史実践」

亀井恭祐「戦後広島における平和教育：是正指導を経験した教師のオーラル・ヒストリーに着目して」

● 会場３（３番講義室）

司会：能川泰治（金沢大学）、酒井朋子（京都大学）

松原かおり「与論島の語りを残す映像表現：観光映像の記録性を探る試み」

木村豊・那波泰輔「占領期の風景写真／映像が誘発する語り：GHQ 関係資料を用いたビジュアルエリシテーション調査を通して」

木川剛志「「語りの継承」としての映画と書籍：オーラル・ヒストリーを当事者として紡ぐ意味」

高橋泉「異文化接触の記憶と社会的包摂に向けた継承：多様な語りを手がかりに」

坪田＝中西美貴「台湾先住民女性たちの「よくある話し」と冷戦」

12:00～13:10　昼休み　理事会
13:10～14:10　若手実践企画①　「暴力の「あと」：沈黙の解釈をめぐって」
14:10～15:10　若手実践企画②　「植民地主義と〈わたし〉」
15:10～15:20　休憩
15:20～16:20　若手実践企画③　「「ケアの実践」の可能性：オーラル・ヒストリー実践者同士による対話と回復の試み」
16:20～17:40　総会、奨励賞授賞式
18:00～　別会場で懇親会

■ 9 月 14 日（日）

会場　大阪大学豊中キャンパス　法経講義棟

9:30～12:00　自由報告部会　２日目

● 会場１（２番講義室）

司会：大門正克（横浜国立大学）

金成洙「断絶と孤立のライフヒストリー：大阪・釜ヶ崎の元日雇労働者を事例に」

【テーマセッション②】田沼幸子ほか「まだ見ぬ「わたし」を語る：マルチモーダル人類学の試み」」

● 会場２（４番講義室）

司会：橋本みゆき（立教大学）、矢吹康夫（中京大学）

坂本知壽子「オーラルヒストリーのつながり直し：他者が聞き取った声を引き継ぐ」

村中大樹「遺品と資料の間（あわい）：オーラル・ヒストリーを通じた森田友和関連資料の再解釈」

竹原信也「遺されたものと家族の語りから読み解く満州女学校における挺身看護隊・八路軍留用の歴史」

吉成哲平・三好恵真子「東アジアへ拓かれていく長崎の生活者たちの歴史：写真家 東松照明が捉え直し

ていった被爆の現実」

大池真知子「声が聞かれにくい人たちのライフライティング：アフリカの先行事例と日本での応用」

● 会場３（３番講義室）

司会：謝花直美（琉球大学）、清水美里（名桜大学）

大森貴弘「戦争に関する虚偽証言の拡散・定着メカニズムの分析：人間魚雷「回天」の「創作遺書」を実例に」

朴洸弘「戦争体験を振り返る元日本軍人の複数的自己：韓国人研究者によるアクティブ・インタビューを中心に」

杉本雄一郎「兵士の証言が明らかにする「大東亜戦争」最西端の戦場の実相：日本占領下アンダマン諸島における「戦争犯罪事件」の実態解明を中心に」

敖夢玲「再生される声、継承される記憶：フィリピン地方都市における広東系女性移民の音声資料から」

渡部春奈「歴史記録としての地名：インド・ナガランド州における名づけの実践」

12:00～13:00	昼休み　次期理事会
13:00～14:00	若手実践企画④　「いま、戦争と移動をどう語るか：記憶の継承と現在性」
14:00～15:00	若手実践企画⑤　「わたしがアーカイブを作るとき／使うとき：可能性・困難・権力を考える」
15:00～16:10	若手実践企画　まとめ　コメント　小林多寿子（一橋大学）、休憩、意見交換
16:10～	閉会挨拶　会長・開催校理事・次期会長あいさつ

３．自由報告要旨

【１日目】9:30～12:00　大阪大学豊中キャンパス　法経講義棟

● 会場１（５番講義室）

中原逸郎（楓錦会）

「西洋音楽の受容：京都音楽会を中心に」

本発表では聞き書きから、大正期の都市民の生活を確認する。

京都市出身の調査協力者の曽祖父・曾祖母に関する伝聞を中心に、個人の営みとしての吹奏楽導入と都市の歴史を共時的に捉える試みをした。明治期から大正期を通じて調査協力者の曽祖父・曾祖母家業の帆布鞄作成の傍ら、時代の先端を行く文物に触れ、ミシンの購入、洗濯業の開始、次いで舶来楽器の購入、そして楽士の養成と劇場や映画館への派遣といった事業を通じ、時代を生きてきた。聞き書きから、京都のオーケストラの魁となった都市民の先進的な生き方の一つを確認した。

ビヤンビラ キララ（東京大学大学院　院生）

「記述の客観性とは何か：在日スリランカ人２世のライフストーリーを例に」

近年、質的研究の一形態として、オートエスノグラフィーと呼ばれる方法論が注目をあつめている。オートエスノグラフィーとは、調査者が自己を対象として主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する研究手法だが、これはエスノグラフィーとどう異なるのか。研究手法により、記述の客観性が揺らぐことはあり得るのか。本報告では、在日スリランカ人２世のライフストーリーを素材として、これらの問題に実践的に応えてみたい。

在日スリランカ人２世は、親世代から継承するかたちで、日本社会への同化志向が強い傾向がある。他方でかれらは、その身体的特徴により日本社会から異化される存在でもあり、この齟齬がかれらの人生に多大な影響を及ぼしている。日本の社会学において、人種に関する議論は黎明期にあるが、在日スリランカ人２世の語りはその発展に貢献し得る。

● 会場２（４番講義室）

久志隆子（名桜大学大学院　院生）

「沖縄戦における中城村津覇の住民の体験：選択の違いによる体験の差」

沖縄戦での住民の体験は選択の違いで大きく異なる。１つ目には熊本や沖縄本島北部への疎開である。２つ目には沖縄本島南部への避難である。３つ目には津覇や隣の集落奥間の山の壕や墓に隠れるしかない選択である。

熊本に学童疎開した児童たちを苦しめたのは空腹と寒さ、寂しい気持ちであり「ヤーサン、ヒーサン、シカラーサン」というのは児童たちの気持ちを表す。沖縄本島北部への疎開では、食料不足、マラリヤの病苦等で多くが犠牲になった。

沖縄本島南部への避難では機銃掃射や艦砲射撃により犠牲になった。日本兵による壕追い出しや食料の強制的な供出等もあった。

津覇、奥間の山の壕や墓に隠れていた人々は幸いにも早々とアメリカ軍の捕虜となり命を長らえた。

謝花直美（琉球大学）

「沖縄戦下の沖縄島中南部の食糧問題：住民証言と戦場行政の視点から」

1945 年の沖縄戦で米軍は４月１日沖縄島中部地域に上陸し、島を南北に分断した。食糧問題の視点からは、北部山岳地帯に立退き（疎開）した住民が多数餓死したことが分かっている。一方、中南部の住民については米軍の侵攻によって、第 32 軍の撤退、軍民混在となった戦場の被害が考察されてきたが食糧という視点からの接近は少ない。本報告では、首里市の日本陸軍第 32 軍司令部が５月下旬に撤退するまで、以北の地域が 40 日余主戦場だったことに着目する。米軍によって南北に分断された地域で沖縄県の戦場行政との関連を視野に入れつつ、食糧を巡る諸問題が住民にいかに影響したかを考察する。

猪岡叶英（大阪歴史博物館）

「ある在阪沖縄出身者による祖先祭祀の継承と実践にみる語りなおし」

報告者は、在阪沖縄出身者と沖縄で暮らす親戚を調査対象とし、位牌・仏壇等、祖先祭祀に不可欠な「モノ」が移動する背景と経緯を明らかにすることを通して、戦後生活史における沖縄出身者の存在を再評価したいと考えてきた。これに伴い、2015 年に、沖縄県糸満市出身で、父親の代より大阪に在住する沖縄出身者に対して先祖の香炉を継承した背景と経緯について聞き取り調査を実施した。その 10 年後にあたる 2025 年に同じ人物に対して、再度行った聞き取り調査において、話者のなかで祖先祭祀に対する意義づけに変化が生じていることを確認した。本報告では、この変化が生じた背景として話者の高齢化や新型コロナウィルスの感染拡大があると考え、それらがどのような影響を与えたのかを考察する。

宮崎嵩啓（岩手大学）

「宮城県石巻市「私設平和資料館」の歴史実践」

宮城県石巻市の元高校教師・佐々木慶一郎氏（79）は，改装した自宅で「私設平和資料館」を営む。資料館には佐々木氏が 60 年にわたって収集したアジア・太平洋戦争関係の資料，約 4,000 点が収められている。近年は，資料館を報道で知った遺族による遺品の寄贈も相次いでいるという。集められた資料は館の「常設展」「企画展」で公開されており，訪れた見学者は佐々木氏の解説に耳を傾けていた。本報告は，この私設平和資料館の取り組みを，歴史学と社会科教育学にかかわる民間の実践として捉え，その特質と意義について明らかにすることを試みる。

亀井恭祐（広島大学大学院　院生）

「戦後広島における平和教育：是正指導を経験した教師のオーラル・ヒストリーに着目して」

戦後広島において被爆教師を中心に展開されてきた平和教育が、1998 年の文部省の是正指導により大きく転換されることになる。是正指導とは、1998 年 5 月 20 日に文部省によって広島県教育委員会に通達されたものである。そして学校現場において施作以前は、平和教育について教師が主体的に教材研究、授業計画を行っていた。しかしながら施作後、文部省からの圧力が厳しくなり教師主体から管理職主体の平和教育へと変容していった。そこで是正指導を経験した退職教師に焦点を当て、彼/彼女らにとって、「是正指導」とは何だったのか、ということを教師のオーラル・ヒストリーに着目して考察する。

● 会場３（３番講義室）

松原かおり（日本文理大学）

「与論島の語りを残す映像表現：観光映像の記録性を探る試み」

本発表では、鹿児島県与論島において制作した観光映像「与論ファクトリー」を事例に、地域住民の語りをどのように映像として表現し、記録することが可能かを探る。神話や島唄、日常の声といった地域特有の

語りを取り入れながら、語り手の選定やナレーションの構成、演出上の工夫について整理する。観光映像という形式において、記録性と創作性のあいだにある表現の可能性や課題について考察を試みる。

木村豊（大正大学）・那波泰輔（成蹊大学）
「占領期の風景写真／映像が誘発する語り：GHQ 関係資料を用いたビジュアルエリシテーション調査を通して」
写真を見ながら対話が進むというのはインタビューの中でしばしば見られる光景であるが、ビジュアル資料がインタビューにどのような効果をもたらしているのかについてはオーラルヒストリー研究の中でもほとんど論じられてこなかった。その一方で、近年、ビジュアルツールを用いる研究の中では写真や映像を提示しながらインタビューを行うビジュアルエリシテーション調査がひとつの研究手法として確立されつつある。そこで、本報告では、調査の手法をめぐる議論を整理したうえで、占領期に GHQ によって撮影された写真／映像資料を用いて行ったビジュアルエリシテーション調査の記録にもとづきながら、風景の写真／映像が語りを誘発することについて検討したい。

木川剛志（和歌山大学）
「「語りの継承」としての映画と書籍：オーラル・ヒストリーを当事者として紡ぐ意味」
1947 年、戦後混乱期の横須賀に「混血児」として生まれた木川洋子。1953 年、養子縁組により渡米した彼女と、発表者は同じ名字を持つという縁だけで知り合った。生き別れた実母を探す過程で、当時の横須賀の状況や「混血児」の養子縁組の背景に触れ、それらを彼女の来日と重ねて映画『Yokosuka1953』として劇場公開した。この映画は学術的発表物といえるのか。当事者として関わることで客観性は揺らいだが、当事者だからこそ見えた風景もあった。その葛藤は、次に一般書『横須賀 1953』として綴ることとなった。本報告では、研究者であり、当事者でもある立場から紡いだオーラル・ヒストリーの制作物の意義とその可能性について考察する。

髙橋泉（大谷大学真宗総合研究所東京分室）
「異文化接触の記憶と社会的包摂に向けた継承：多様な語りを手がかりに」
本報告では、戦前～戦後にかけて、台湾少年工や日米国際児、インドシナ難民等の大規模な異文化受け入れを経験した首都圏の米軍基地周辺に位置するある地域に着目する。そして、基地周辺の地域住民や関係者の語りを通じて、その記憶のありようを探る。対象地域については、これまでも多数の報道や既存研究で実名を挙げて異文化接触に対する当時の住民の態度と諸問題が言及されてきたが、本研究では地域を個別に評価することを目的とせず､関係した人々がそれぞれの視点で語る異文化接触の記憶に焦点を当てる｡そして、これらの語りから、語られなかった部分も含めて当時の実態を解釈し、社会的包摂に向けた歴史的事実の継承について検討してみたい。

坪田＝中西美貴（成蹊大学・上智大学）
「台湾先住民女性たちの「よくある話し」と冷戦」
本発表は、1950 年代に生まれたひとりの台湾先住民女性の語りを通して、冷戦下の台湾を先住民女性として生きることとはどのような経験であったのかを考察する。先住民女性にとっては「よくある話し」として語られた語りを特徴づけているのは、日本の植民統治下で育った親世代には制限されていた移動が、距離的にも回数的にも自由な移動へと変化していることである。言うまでもなく植民統治の終了が先住民に対する様々な管理の終了ではあるが、移動という選択をたやすくしたのは、アメリカ援助による台湾社会の変化と先住民の慣習からであった。ポストコロニアルと冷戦と慣習とは、先住民女性が生きる中にいかに位置づいていたのだろうか。

【２日目】9:30～12:00　大阪大学豊中キャンパス　法経講義棟

● 会場１（２番講義室）

金成洙（京都大学）
「断絶と孤立のライフヒストリー：大阪・釜ヶ崎の元日雇労働者を事例に」
本発表では、大阪・釜ヶ崎における元日雇労働者たちのライフヒストリーを通し、家族や社会から断絶した彼らの暮らしに焦点を当てつつ、彼ら個々人が抱いた感情について考察する。その後、それらの感情が引き起こされた背景を辿る。
日雇労働者たちは、戦後、貧民地区であった釜ヶ崎が寄せ場(日雇労働市場)として改造されて以来、様々な社会的排除を受けてきた。現在、引退し元日雇労働者になった彼らは、生活保護を主な収入源としつつ、

釜ヶ崎地域に孤立した生活を送っている。労働者たちは、もう会えない家族に対する恋しさ、過去自分をいじめた人たち対する怒り、自らの行動で野宿が辞められたという自負などの感情を抱いていた。これらの感情は、彼らが人間関係において得た傷と、再び誰かに繋がりたいという欲求から生まれたものであった。

● 会場２（４番講義室）

坂本知壽子（立命館大学）

「オーラルヒストリーのつながり直し：他者が聞き取った声を引き継ぐ」

1960 年代、作家山本茂美は、高齢となった明治の糸引き女工たちにインタビューをし『あゝ野麦峠』を出版 した。1979 年に山本薩夫監督により映画化され、日本全国に糸引き女工のライフストーリーが知られると、「女工哀史はなかった」と女工たちの苦痛を否認（denial）する主張があらわれた。その声は現在も根強く、近年では「女工哀史」から「女工讃史」へと歴史観を見直す動きも報道されている。このたび私は、書籍『あゝ野麦峠』の元となった山本茂美氏のインタビューの音源を入手した。明治の糸引き女工たちは晩年、山本茂美氏に、何を、どのように語ったのか。山本氏はどのように聞き取り、活字にしたのか。すでに死者となった者たちの苦痛について、他者が聞き取った声を私たちはいかに引き継ぐことができるのか。オーラルヒストリーとして完成された記述について、一次資料に立ち返り、繋がり直しを試みた い。

村中大樹（大阪大学大学院　院生）

「遺品と資料の間（あわい）：オーラル・ヒストリーを通じた森田友和関連資料の再解釈」

森田友和は、子ども移民としてブラジルへ渡り、太平洋戦争直前に日本へ帰国した人物である。晩年を故郷の高知で過ごした森田は、ブラジル関係の書簡や自身が所有する様々な記録を高知市立自由民権記念館に寄贈している。森田はブラジル移民研究の貴重なインフォーマントとして研究者の間で知られる人物であり、彼の持つ写真や彼自身の語りは「子ども移民」の資料としていくつかの論文でも言及されている。しかしながら、晩年の森田と交流を続けてきた報告者にとって、寄贈資料は森田の「遺品」でもあり、子ども移民ではなくなった森田の人生という文脈なしで解釈できるものではない。そこで本報告では、森田のオーラルヒストリーをもとに、森田資料を「子ども移民」資料に留まらない、より広く重層的な文脈を有する歴史的資料として再解釈してみたい。

竹原信也（奈良工業高等専門学校・豊橋技術科学大学）

「遺されたものと家族の語りから読み解く満州女学校における挺身看護隊・八路軍留用の歴史」

私は JOHA16・17 回大会にて、中国の日本人居留地・済南で生まれ、満州・錦州女学校時代に挺身看護隊を経験し、終戦後には八路軍に従軍看護婦として留用され中国各地を転々とした女性の口述史を報告し、その聞き書き資料を『日本オーラル・ヒストリー研究』第１５巻（2019 年）で発表した。　今回の報告では、その同窓生（故人）の親戚からの情報提供を受け、2024 年に新潟県新発田市で実施した調査について報告する。調査では、満州に関する遺品を閲覧し、併せて遺族の聞き取りも実施した。家族の語りや遺品を通じても、満州・錦州女学校における挺身看護隊、八路軍留用の歴史が浮かび上がってくる。遺されたものや当事者以外の語りから見えるものは何か、その意義や限界について考えてみたい。

吉成哲平（大阪大学）・三好恵真子（大阪大学）

「東アジアへ拓かれていく長崎の生活者たちの歴史：写真家 東松照明が捉え直していった被爆の現実」

写真家の東松照明は、1960 年代初頭の長崎において被爆後の生活に衝撃を受け、生涯をかけて被爆の現実を撮り続けていったことが知られている。一方、先行研究では、キリシタン弾圧と被爆という出来事を重ね合わせつつ彼が長崎の「受難」の歴史を描いたとして一面的に論じられがちであった。それゆえ、東松が沖縄での撮影経験を背景に後年には長崎へ移住しつつ、開港以来の長崎の町の「チャンポン文化」へと魅せられていった足跡の重みが等閑視されてきた。そこで、本発表では独自の方法論である「写真実践」より、東松が「町歩き」を通じて受け止めていった、東アジアへと拓かれた長崎の重層的な歴史を明らかにすると共に、発表者らの現場での再帰的な撮影行為を介した記憶の継承の可能性についても報告する。

大池真知子（広島大学）

「声が聞かれにくい人たちのライフライティング：アフリカの先行事例と日本での応用」

アフリカの各地で HIV とともに生きる人たちが、自分のライフストーリーを表現する活動を 2000 年ごろから活発化させた。発表者は文学研究の立場から、それらのライフライティングをテキスト分析してきた。最近は、日本の民族的なマイノリティのあいだでその活動を応用しようと試みているものの、執筆者の確保、執筆の支援など、課題に直面している。本発表では、アフリカでの活動（とくにメモリーブックとボディマッピング）を紹介し、日本で応用する際の課題を共有する。それによって、隣接領域の会員と協働して、日

本で効果的に実施する方策を見つけることを希望している。

● 会場３（３番講義室）

大森貴弘（横浜市立大学）

「戦争に関する虚偽証言の拡散・定着メカニズムの分析：人間魚雷「回天」の「創作遺書」を実例に」

数年前、人間魚雷「回天」の搭乗員が書いたとされる「１８歳の回天特攻隊員の遺書」なるものがインターネット上で「感動を呼ぶ」として拡散されました。自治体が手ぬぐいや缶詰などのお土産類に印刷するなど、事実として扱われましたが、実際には元海軍士官の男性が戦後、創作したものでした。戦争に関する「虚偽」の証言は、何を根拠に「虚偽」と判断されるのか。そして、どのように拡散し、社会に定着していくのか。「回天」創作遺書の実例を参考に、そのメカニズムを分析しました。

朴洸弘（大阪公立大学大学院　院生）

「戦争体験を振り返る元日本軍人の複数的自己：韓国人研究者によるアクティブ・インタビューを中心に」

本研究では、旧日本軍に所属して出征していた存命者を対象にしたインタビューデータを中心に、戦時期に形成された国民意識や対敵観が変容していく過程、さらに、戦後における戦死や戦争そのものへの意味付けに着目したい。1980 年代以降、日本とアジア諸国の関係が新しく設定される中で想起された、日本人以外の戦没者（場合によっては、日本による被害者）の存在は、日本社会における戦死や戦争への既存の意味付けに亀裂を引き起こすものである。かつて日本軍に属して戦争を体験したインタビュイーが、大日本帝国の植民地であった朝鮮（現代の大韓民国）出身の聞き手を出会うことにより、その存在に向き合う様相は、歴史をめぐる東アジア次元の相互理解を模索する上で示唆するところがあろうと期待する。

杉本雄一郎（東京社会福祉士会）

「兵士の証言が明らかにする「大東亜戦争」最西端の戦場の実相：日本占領下アンダマン諸島における「戦争犯罪事件」の実態解明を中心に」

1942 年 3 月 23 日、大英帝国領インドの版図アンダマン諸島は、帝国日本陸海軍によって占領された。爾後三年半、島民共同体は海軍第十二特別根拠地隊による統治下におかれたが、その間、もっぱらアンダマンの島民を被害者、駐留日本軍関係者を加害者として戦後シンガポールで英国により裁かれる戦争犯罪が多数発生した。本報告は、そのうち特に被害者及び刑死者共に最多を数えながら、戦後 80 年を迎えた今日においても依然未解明のままにある「ハヴロック島（現スワラージ島）事件」と呼ばれる戦争犯罪に注目し、その実態をとりわけ元第十二特別根拠地隊の兵士による証言をもとに解明する[WO235/839]。そしてそこから、「大東亜戦争」最西端の戦場の実相を明らかにする。

敖夢玲（大阪大学）

「再生される声、継承される記憶：フィリピン地方都市における広東系女性移民の音声資料から」

本報告では、フィリピン・ダバオ市において 20 世紀前半に中国本土から移住した広東系女性・王秀蘭（故人）から筆者が聞き取った音声資料を手がかりに、記録に残されにくかった女性移民の経験とその記憶の在り方を検討する試みである。

王は広東で生まれ、上海で育ち、フィリピン人男性と結婚した。日中戦争および中国内戦を経て家族とともにフィリピンへ移住し、各地を転々とした後、ダバオに定住した。中国系女性とフィリピン人男性の婚姻・移動という組み合わせは、当時として極めて稀であり、現在に至るまで研究においてもほとんど論じられていない。とりわけ第一世代の女性移民の語りは、書面資料にはほとんど残されてこなかった。

報告者は 2019 年以降の現地調査で、1990 年代に録音された王のカセットテープを入手・再生した。そこに記録されていたのは、戦争・移動・定住の個人的記憶であると同時に、それを聴いた娘や孫の語りを促す媒介でもあった。本報告は、書かれなかった声に耳を澄まし、世代を超えた語りの生成と記憶の継承の在り方を捉え直す試みである。

渡部春奈（津田塾大学・日本学術振興会）

「歴史記録としての地名：インド・ナガランド州における名づけの実践」

本報告の目的は、インド北東部ナガランド州における名づけの分析をとおして、地名が人びとの記憶を補助する役割を果たしていることをあきらかにし、地名の歴史記録としての機能と価値を解き明かすことにある。現地 住民ナガの口頭伝承は、場所や物理的なモノと組み合わされて語られ、各要素が互いに補完しあう形で成り立つことが多い。古来から存在した地名を、連合軍と日本軍が激戦を繰り広げたインパール作戦後、「日本との戦争の地」と改名した場所などを事例に、名づけの方法とプロセスを提示する。本報告は聞き取り調査と参与観察に基づき、ナガの人びとの名づけの実践から、どのように過去が想起され、記憶されているのかを検討する。

《テーマセッション要旨》

テーマセッション① ◆　9 月 13 日（土）　会場１（５番講義室）

「フィールドワークを通した自己の変容：他者に出会う、当事者になる、当事者として語る」

コーディネーター：林貴哉（武庫川女子大学）

森川麗華（東京大学大学院　院生）

岡野（葉）翔太（神戸大学）

林貴哉（武庫川女子大学）

コメンテーター：太田真実（大阪大学）

聞き取り調査を行うにあたって、フィールドでの参与観察や、調査協力者との協働的な実践に取り組むことがある。本テーマセッションの報告者は「他者」について研究しているが、フィールドワークの過程で、何らかの意味で「当事者」であることを引き受けたり、逆にある集団の「当事者」としてラベルを貼られることに違和感を抱いた経験を有する。「自分は当事者なのか」という問いは各報告に共通するが、それぞれの文脈において異なる意味を持つ。この意味を問うことによって研究者がフィールドで向き合ってきたことや向き合っていくべきことを検討する。

森川麗華（東京大学大学院　院生）

「２人の四世：「中国残留婦人」のひ孫として」

報告者は「中国残留婦人」を曾祖母に持つ「中国残留婦人」四世である。だが、幼少期から自分の曾祖母が「中国残留婦人」であると気が付くまでは単なる「日中ハーフ」であると認識してきた。報告者の 9 歳下の妹も同様である。２人は同じく神戸に生まれ、華僑の子どもたちのための幼稚園／学校に中学まで通い、高校から初めて日本の公立高校に進学した。だが、2 人の間の決定的な違いは、報告者はかつての「満洲国」があった場所において曾祖母が「中国残留婦人」であることを知り、その後実際に彼女にその経験を聞いていることである。同じひ孫である 2 人だが、その間にはアイデンティティ認識や日本／中国への考えなど、異なる部分が多くある。本報告では 2 人のライフストーリーからその差異や相似点をあぶりだすと同時に、単にひ孫であるということが「四世の当事者」を意味しないのだということを明らかにする。

岡野（葉）翔太（神戸大学）

「「神戸華僑」たちによる神戸華僑の歴史記述と展示活動：「神戸華僑」と見なされ得る私の参与とコンフリクト」

神戸華僑に関する歴史叙述や神戸華僑歴史博物館の展示において、「中華民国」や「台湾」と結びついてきた神戸華僑に関する関心は総じて低かった。台湾出身ニューカマーの父を持ちながら、大陸中国の旗を掲げる神戸中華同文学校に通った報告者は、研究を始めたばかりのころ「神戸華僑」の若い大学院生とまなざされてきた。その上で報告者は神戸華僑の歴史叙述や博物館展示にて、「台湾」と「中華民国」を組み込む実践を行い、既存の言説との間で葛藤を抱えてきた。本発表は、2010 年代までの神戸華僑の歴史記述と博物館の展示活動を対象とし、それに私自身が参与するなかで感じた、「神戸華僑」による歴史叙述と私との距離や周囲とのコンフリクトについて考察する。

林貴哉（武庫川女子大学）

「複数の視点からベトナムに向き合うことで生じたジレンマと実践」

報告者はベトナム難民を対象に研究を行いつつ、在日ベトナム人支援団体の実践にも参与している。冷戦下、南北に分断されていたベトナムで生まれ育ち、1975 年のベトナム共和国崩壊後、ベトナムから逃れた人々に聞き取りを行ったことで、「在日ベトナム人」と一括りにされ得る人々であっても、出生時期・場所に応じて異なる「ベトナム」を参照していることを知った。報告者自身が意図していなかったとしても、特定の用語や国旗の使用によって、立場の違いが反映された言動をしていると見なされることに気づくようになり、ベトナムについて発言することが躊躇われることもある。このような葛藤に向き合うことで見出した実践のあり方を紹介する。

コメンテーター：太田真実（大阪大学）

「調査者のアイデンティティ交渉」

報告者は韓国で生まれ、日本で成長した日韓ハーフである。日本の小学校に通い、中学校からは在日コリアンが多く在籍するコリア国際学園に通いながら、韓国語を継承語として学んできた。現在、中国語を継承

語として学んだ人々を対象にライフストーリー研究を行っている。本報告では、自身の生い立ちや研究を交えながら、3 名の報告をもとに、様々な文脈の中で当事者であることを引き受けたり、引き受けなかったりする調査者のアイデンティティ交渉に注目して議論を深める。

テーマセッション ② ◆　9 月 14 日（日）　会場１（２番講義室）

「まだ見ぬ「わたし」を語る：マルチモーダル人類学の試み」

コーディネーター：田沼幸子（東京都立大学）

森田良成（桃山学院大学）

松川恭子（甲南大学）

田沼幸子（東京都立大学）

コメンテーター　酒井朋子（京都大学）

人類学者は長期調査において様々な人々のオーラルヒストリーを聞き、「ネイティブの視点から」当該地の文化や人々を理解するための手段としてきた。一方で個々の経験を聞くことで、「視点」は一様ではなく、当該地の歴史や社会的背景に影響を受けながらも、人それぞれの解釈があることに気付かされてもきた。大学院時代の 2 年前後にわたる長期調査の後、就職した後は関連する地域への短期調査を繰り返してなんとか研究を継続しつつ、日々の教育と業務に追われる。

しかしこの「教育」において、多くの人類学者が長期調査で得た知見と研究の延長線上で、様々な試みをおこなっている。オーラルヒストリーに関わる教育研究もその一つである。学生自身について、あるいは学生の身のまわりの人についての話を聞くことは、彼ら自身がそれまで持っていた「当たり前」を問い直す契機になる。そしてそれが、これまでは受け身で情報や知識を学ぶ側だった学生を、「主体的」に考えさせるきっかけとなる――先んじて期待されるように動く、という「主体的」ではない。自分が平凡かつ透明で中立な存在ではなく、他とは違う見方や思考を持った存在であると認識した上で、改めて世界との関係性を捉え直す、という意味においてである。ただ、オーラルヒストリーは経験を言語化することが前提となっているが、対象となる自分や人は、自らとその経験を語る言葉をすでに常に持っているわけではない。この時、まだ言語化されていない―あるいはこれからも言語化し得ないかもしれない経験を、語り伝えようとする経験そのものも含めて視覚的・感覚的に表現・伝達する方法として、マルチモーダル人類学が応用できるのではないか。本テーマセッションは、こうした問題意識をもとに、三人の教育・研究実践を紹介する。

森田良成（桃山学院大学）

「無音のワンカットから映像と言葉の関係を考える：映像制作を取り入れた教育実践」

森田は、学部生対象の授業で行っている映像制作を取り入れた教育実践について報告する。学生たちは、「固定カメラによる、1 分間の無音のワンカット」の撮影を出発点として、最終的に身の回りの人や自分自身を対象にした短編ドキュメンタリー制作に取り組んでいく。この経験を通して、映像あるいは言葉によって世界をいかに切り取ることができるのかを考えながら、映像と語りの関係、すなわち言語化以前のものと言語化されたものとの関係に対する理解を深め、他者とのコミュニケーションの可能性と、自らと世界との関係をとらえなおしていく。

松川恭子（甲南大学）

「大学教育における「自己語り（self-narrative)」を共有する場作りの試み：インド・ゴアでの協働から考えたこと」

松川は、インド・ゴア大学社会学科所属時の現地指導教員が修士の学生たちに推奨した自己の経験から社会問題を問い直す教育実践に触発され、「自己語り（self-narrative)」を取り入れた様々な学部教育の試みを行ってきた。例えば、写真、音楽、ナレーションを組み合わせて作る「自己語り」の動画「デジタル・ストーリーテリング」の制作過程では、「語りを共有する場づくり」を工夫することで、学生たちが自らを振り返り、他者に開示する語りが可能になった。また、インドの学生との協働の試みでは、各社会での大学教育という制度の問題が「自己語り」に影響を与えていることがわかった。

田沼幸子（東京都立大学）

「人前で見せることで口をついて出ることば：大人が試みる Show & Tell」

田沼はマンチェスター大学で学んだ映像制作の手法を日本でのフィールドワークの授業に応用してきた。ある時期から短い映像を撮影・上映する前に Show & Tell という何かモノを持ってきて話す、という回を入

れるようにした。すると、各自がイキイキと話し、質問し、打ち解ける様子が見られた。上記を応用したワークショップを昨年、バルセロナの教育学部の学部生・大学院生に向けて行った。今年はバルセロナ自治大学のワークショップで学んだコラージュを日本で取り入れた。これらは相手の話を聞く前に自己を捉え直し、語り直すことの重要性を示している。

コメンテーター　酒井朋子（京都大学）

４．　若手実践企画

《若手実践企画趣旨文》

2024 年 9 月、ＪＯＨＡの研活委員（大門正克、小黒純）と事務局（根本雅也）でつくる「若手実践企画」運営委員会は、若手会員に向けて、「若手実践企画」への参加を促す提起を行った。「若手実践企画」は、若手会員が、2025 年度大会に向けて、「自分たちで大会の企画をつくる」ものであり、そのときの「趣旨」は以下のようであった。

● 2024 年 9 月提案の「趣旨文」

小さな学会であるＪＯＨＡは、学問分野にとらわれず、また会員間の垣根も低く、相互の交流と学び合いを大事にしてきました。近年では、若い世代の新規入会者が続いています。新しい会員の専門分野や関心領域もまた多様です。

若手実践企画では、若手の会員間の交流をはかりつつ、互いの研究の幅を広げ、研究・調査の質を高めることを目的としています。具体的に行うのは、新しく出会った若手会員がグループをつくり、2025 年大会の企画を自分たちで考え、作り、開催することです。参加者は少人数でじっくりと自分たちの調査や研究を共有し、議論を重ね、大会のテーマセッションやワークショップを企画・開催することを試みます。

テーマセッションやワークショップは、参加者が登壇することを想定していますが、経験豊富な会員にサポートを依頼することも可能です。その一方、既存の研究フレームにとらわれない、若手会員ならではの大胆な発想、常識を覆すようなアイデア、自由奔放な企画など、大歓迎です。「こんなチームを組んでみたい」「もっと批判・批評してほしい」「ワークショップでみんなと議論したい」といった希望（野望？）をぜひ一緒に〈かたち〉にしてみませんか？

● 若手会員の参加とグループづくり、準備

ここでの若手会員とは、研究のキャリアをふまえた自己判断によるものであり、19 名の若手会員が参加した。2024 年 10 月 14 日に対面とオンラインを組み合わせた打ち合わせを行い、その後、５つのテーマによるグループができた。「オーラル・ヒストリーの力」「アーカイブ」「戦争と人の移動」「植民地主義と研究者の責任」「暴力のあと」であり、Slack を使いながら全体の意見交換を進めつつ、各グループはグループ間の意見交換を深めた。

2025 年 1 月 31 日にはオンラインで全体の打ち合わせを行い、4 月 20 日には対面とオンラインで打ち合わせを行った。以上の準備を経て、6 月末には、以下の５つの若手実践企画が提出された。「暴力の「あと」―沈黙の解釈をめぐって」「植民地主義と〈わたし〉」「【ワークショップ】「ケアの実践」の可能性：オーラル・ヒストリー実践者同士による対話と回復の試み」「いま、戦争と移動をどう語るか―記憶の継承と現在性」「わたしが、アーカイブを作るとき／使うとき―可能性・困難・権力を考える」。

● 大会における若手実践企画

若手実践企画は、企画で出会った 19 名が 5 つのグループに分かれ、「自分たちで大会の企画をつくる」べくとりくんできた内容について、各グループにおける試行錯誤の過程を含めて報告するものである。研究の

到達点のみを報告するのではなく、グループで議論したからこそ気づいたこと、大会企画としてとりくんで得たこと、難しかったこと、あらためてオーラル・ヒストリーについて思うことなどを含めた報告になる。若手実践企画では、ＪＯＨＡに集う若手の問題関心、グループでの気づき、示唆、含意などを含めて報告されるはずであり、いわば研究過程のさまざまな痕跡が企画のなかにあると思われる。

大会における若手実践企画は、1 時間の持ち時間を各グループで報告と質疑などにあてるものであり、最後には「まとめ」の時間を設け、小林多寿子氏（一橋大学）にコメントをお願いし、グループによるリプライのあと、参加者全員で意見交換を行う。若手実践企画がＪＯＨＡの未来を切り拓く場になることを願っている。

《若手実践企画要旨》

★　若手実践企画①　「暴力の「あと」: 沈黙の解釈をめぐって」

大森優美（ステレンボッシュ大学）

廣野量子（同志社大学大学院　院生）

本セッションは、国家間戦争や民族紛争などによる大規模な暴力の「後」とされる社会において、その「痕」を抱えながら生きる人びとが、暴力の経験について「語らないこと」、すなわち沈黙について再解釈することを 目的とする。報告者はそれぞれ、元日本軍「慰安婦」たちの沈黙（廣野）と、紛争後社会・北アイルランドにおける母親たちの沈黙（大森）を主題として取り上げる。

戦時下で経験・目撃した暴力の経験について、人びとが戦後社会で口を閉ざすことは、世界の多くの戦後・紛争後社会において報告されている。戦後社会をめぐる従来の研究の多くは、人びとが負の記憶について沈黙することを、国家権力や社会的・文化的な権力者たちによる不正義の隠蔽や抑圧の結果として理解してきた。 このような文脈では、沈黙は受動的な状態であることが前提とされ、人びとが沈黙を破り、語ることこそが奪われた主体性を回復する行為、あるいは抑圧に抵抗する能動的行為であると暗に認識されてきたといえる。

これに対し、近年の研究では、暴力を経験した人びとが、あえて「語らない」ことを選択していること、すなわち、人びとが沈黙を能動的に行使している可能性が指摘されるようになっている。沈黙を単に「意味ある」語りの不在や主体的意思の欠如として認識するのではなく、沈黙を一つの主体的な言語行為として認識し、その意味を読み取ろうとするアプローチである。

廣野量子「痛みを聞く、沈黙を書く：川田文子『赤瓦の家–朝鮮から来た従軍慰安婦』におけるペ・ポンギの沈黙とつぶやき」

廣野報告では、日本軍「慰安婦」として沖縄の渡嘉敷島に連れて行かれたペ・ポンギの聞き書きをした川田文子『赤瓦の家–朝鮮からきた従軍慰安婦』（筑摩書房、1987 年、以下『赤瓦の家』）を取り上げる。『赤瓦の家』は 3 章構成になっており、ペ・ポンギの語りを人生史として時系列に再構成したのが第 1 章に当たる。「慰安婦」にさせられていた時期だけに限らず、幼少期から川田が訪ねていった 1970 年代後半頃までの軌 跡が綴られるが、特に本報告ではその戦後の移動のあり方やつぶやきに着目する。本書を単に「慰安婦」被害の証拠として読むのではなく、暴力の「後」に傷「跡」を抱えながらも生きのびようとした一人の人が自らの経験をいかに語り、あるいは語らなかったり語れなかったりするのか、そして川田がそれをいかに聞き、想像し、何を書き留めようとしたのか、そして沈黙をどのように解釈しようとしたのか／しなかったのかを考察していく。そのなかで、沈黙は必ずしも強いられているだけではなく、むしろ生きのびるためにこそ行使される側面もあるのではないかと問いなおす。

大森優美「家庭内における紛争体験の伝承と沈黙：北アイルランドの女性たちの語りから」

大森報告では、現代北アイルランドを事例として、長期の紛争状態を経験して育った女性たちによる、和平が成立した「紛争後」の社会での子育てをめぐる語りを分析する。報告者の研究では、紛争の記憶とトラウマを抱えながら子育てをする女性たちが、家庭内で紛争の過去について語らないという例が多く見られた。母親たちの語りからは、紛争の記憶に蓋をし、口を閉ざすことは、単に心の痛みを忘れて日常をやり過ごすための個人的ないとなみであるだけでなく、新しい時代を生きていく子どもたちに負の遺産を継承しないために行う、主体的な行為でもあることが明らかであった。一方で、母親たちは、過去をめぐる家庭内での沈黙が、本来の意図に反して、子どもたちに負の影響を及ぼす可能性を案じ、主体的に行使してきたはずの沈黙をめぐって後悔・葛藤していることもわかった。このような分析を通じ、本報告では、暴力をめぐる沈黙について、主体的か、 非主体的かという二項対立的な分類を超えた解釈の必要性を論じる。

（構成）趣旨説明／個別報告／報告者間対話／質疑応答

（司会）片平深雪（立命館大学大学院　院生）

★　若手実践企画②　「植民地主義と＜わたし＞」

竹田響（京都大学大学院　院生）

小谷英里（一橋大学大学院　院生）

久野亜希子（東京都立大学大学院　院生）

谷口生貴斗（北海道博物館・筑波大学大学院　院生）

これまで「植民地主義」は様々な学問分野から議論されてきた。そのなかで、植民地主義が継続している問題が長きにわたって指摘されている)。継続する植民地主義に、わたしたちはどのように応答できるだろうか。このような関心を軸に、本セッションでは、わたしたちと植民地主義の関わりについて考察する。

考察する手がかりとして、＜わたし＞を起点とする視点を導入する。好井（2007）は、差別という事象を＜わたし＞を起点に考えることで、日常のなかに潜む差別を描き出すとともに、差別する自分自身を問い直す必要性を論じた。継続する植民地主義の根底に差別（レイシズム）があることを踏まえるならば、好井が提示した視点は、わたしたちと植民地主義の関わりを考察するうえでも有効であろう。

本セッションでは、以下の４名が＜わたし＞を起点として事例を報告する。

竹田響

竹田は、在日朝鮮人の国境を跨いだ親族ネットワークに関して、文化人類学の視点から考察してきた。当事者の語りにあらわれる葛藤から、親族の離散が日本の植民地支配によって拡がり、その影響が今日も継続しているという問題が浮き彫りになった。継続する植民地主義に＜わたし＞はいかに応答できるのか。

久野亜希子

久野は、アイヌの人びとの「学び」を、ライフストーリーに着目しつつ教育学の視点から検討してきた。アイヌ女性との対話を通じて、聞き手の＜わたし＞がもつ「アイヌ」への固定的な認識が問い直され、彼女の「学び」の背景が浮かび上がった。植民地主義は＜わたし＞のなかにいかに潜んでいるのだろうか。

谷口生貴斗

谷口は、近代北海道移住者の子孫たちによる「開拓の歴史」をめぐる語りを、日本民俗学の視点から分析してきた。彼らの語りにふれるとき、研究者の＜わたし＞が植民地主義に無自覚であるならば、語られることだけをすくい上げることになる。植民地主義の再生産に＜わたし＞はいかに関与しうるのか。

小谷英里

小谷は、朝鮮人被爆者と向き合うマジョリティの人びとの生活史を、社会学の視点から検討してきた。＜わたし＞が日常生活や研究活動における揺れ動きを経験したことで、植民地主義と向きあうマジョリティの人びとの揺れ動きに気づくようになった。マジョリティに焦点を当てることと、継続する植民地主義に＜わたし＞が応答することは、どのように結びつくのか。

以上の事例から、植民地主義は日常生活に散りばめられていること、マジョリティからも対象化できること、語り得ないことからも立ち上がること、研究者が再生産しうること、様々な学問分野から向き合えることなどが明らかになった。これらをもとに、継続する植民地主義に対して、わたしたちがどのように応答できるのかを考えたい。

（構成）趣旨説明／個別報告／結論／質疑応答

★　若手実践企画③　「【ワークショップ】「ケアの実践」の可能性：オーラル・ヒストリー実践者同士による対話と回復の試み」

有馬絵美子（神奈川大学大学院　院生）

大島岳（明治大学）

キムソニア（大阪公立大学）

奈良雅美（特定非営利活動法人 アジア女性自立プロジェクト）

丸川拓己（早稲田大学）

山崎哲（慶應義塾大学）

吉村さやか（日本大学）

本セッションでは、オーラル・ヒストリーに携わる研究者が直面する感情的な負担や困難に着目し、研究者自身へのケアの必要性について、若手実践企画における経験をもとに議論・提言することを目的とする。

本セッションは、若手実践企画において、オーラル・ヒストリーの可能性を探求してきた対話の中から生まれた問題意識を出発点としている。異なる分野のメンバーが、個人的な経験や日常を語ることから始めた対話は、やがて各自の実践をめぐる語りへと発展していった。その過程で、研究者としての戸惑いや苦悩、喜びなどが共有されるとともに、語りを聞く側の、私たち自身の脆弱性に改めて目を向けるようになった。オーラル・ヒストリーには語り手にとって癒しや回復の力があるとされる一方で、その語りに触れる研究者自身が過去のトラウマに呼応する形で深く傷ついたり、フラッシュバックを経験したりすることがある。そのような経験によってオーラル・ヒストリーの実践者が語りを聞きに行けなくなることは、研究遂行能力の欠如とみなされがちだが、その背景にある心理的葛藤は、これまで十分に語られてこなかった。回復手段を持てないまま現場を離れる研究者の存在も、学術の場で可視化されてこなかったのではないか。

研究者は語り手に安心して話してもらうため、時に強い主体として振る舞うが、その関係は固定的ではなく、語りに触れる中で自らが傷つくこともある。そのような傷つきをどうケアし、回復していくか。聞き手である研究者に対する精神的健康上の課題を認めるとともに、対処の方法についても近年検討が始まっている。私たちは今回の企画における研究者同士の対話において、互いの声に耳を傾け、言葉を交わし、ただそこにいるという関係性の中に「ケアの実践」が存在していることに気づいた。研究者が自身の経験や痛みを語ることが回復とエンパワーメントにつながる「ケアの実践」について、当グループの取り組み事例から検討したい。

セッション当日は、こうした「ケアの実践」を来場者と共有し、研究とケアのあり方を共に考えるワークショップを実施する。会場の一角に掲示板と付箋記入コーナーを設け、参加者にはオーラル・ヒストリーの実践現場や研究過程において生じた悩みや感情を無記名で書いて貼ってもらい、それに対して他の参加者がコメントを重ねることで、即興的な対話の場を創出する。セッション内でその結果を共有し、ディスカッションを行う。さらに、今後の取り組みとして、研究者へのケアについて倫理的観点からも検討していきたい。一般的な倫理規定は語り手への配慮を主軸としているが、聞く側である研究者への倫理的配慮は十分に体系化されていない。そのステップとして、当学会においてオーラル・ヒストリー実践者の対話の場を定期的に設けることを提案したい。オーラル・ヒストリーが持つ対話の力をケアという観点から捉え直すことは、剥き出しの戦争や暴力といった現実が繰り返される今日において、その使命と限界を考える際に極めて現代的な意義をもつのではないだろうか。

（構成）報告とファシリテーションは全員で行う
概要説明／ワークショップの実施（付箋を使用した掲示板における「対話」、「対話」の内容をふまえてのディスカッション）／個別報告／質疑応答

★ 若手実践企画④ 「いま、戦争と移動をどう語るか：記憶の継承と現在性」

福田真郷（京都大学大学院　院生）

屈帥帥（大阪大学大学院　院生）

本セッションは、若手研究者がオーラル・ヒストリーを用いて過去の戦争による人の移動に関する研究をおこなうことの意義について、発表者２名が自らの研究からの事例を出しながら、その重要性を論じるものである。

移動研究はさまざまな方面からなされてきたが、本セッションは人口統計、場所や空間に関する議論（移動論的転回も含む）などはその射程としない。移動を経験した人およびその関係者が、いかにその移動を語る（あるいは表象する）かということをあくまで焦点化する。また、ここでの「戦争による移動」とは、特に軍や国家、あるいは戦災などといった、強制力によって引き起こされた移動を指す。戦争による人の移動には、派兵、強制連行、避難など実にさまざまな形式があり、移動する人の属性もまちまちである。また、職業、階級、名前、エスニシティなどの剥奪、付与といったアイデンティティの変容、そして多くの場合は

トラウマも伴われる。そしてその移動は、当事者のみならずその次世代や親族、関係者、ひいては同族集団にも集合的記憶、集合的トラウマとして影響を残しつづける。

屈帥帥

屈発表では、第一次世界大戦における中国人労務者の欧州への移動、改革開放期における中国人の自主的な移動を比較しつつ、第二次世界大戦中の中国人の日本への強制連行と戦後の送還、またそれらの移動の過程における当事者の身分やコミュニティの変化は、彼らやその家族にどのような影響、苦痛を与えたか、分析する。

福田真郷

福田発表は、中国雲南省からミャンマー、タイを経て台湾にたどり着いた国民党軍の残党である「孤軍」およびその子孫らによる、台湾での地域づくりについて論じる。移動経験が世代を超えてどのように受け継がれているか、また、どのように記憶の選択がおこなわれているかに着目する。

本セッションで取り上げるのは、20 世紀の戦争に関係する移動であり、当事者の多くは死没している。そのため、その親族や関係者からの聞き取りが主となった。実際に経験していない、あるいは記憶していない世代・非当事者による語りは、戦争体験の継承や風化という課題を考えるうえで重要である。従来の移動理解を再構築し、多角的な分析を付すことで、記憶の語りとその共有について論じていく。

戦争に関する語りは、ナショナリズムと何らかの関係を取り結ぶ。ナショナルな物語・表象において、事実は選択的に取り上げられ、そして都合よく解釈されていく。不都合なものは封殺、忘却、あるいは否定される。移動の記憶やトラウマも例外ではなく、こうした記憶をめぐる政治とさまざまに交錯してきた。

ポスト・トゥルースの時代と言われる現在、歴史修正主義は各国で猛威をふるう。また、単純化された加害者・被害者、当事者・非当事者の二分法や、ポジショナリティに固執すること（犠牲者意識ナショナリズムを含む）は、時に進行中の人権侵害や加害行為に加担する危険性をもはらむ（cf. ドイツによるイスラエルのガザ侵攻肯定）。こうした一面的かつナショナルな（集合的な）言説に還元することの危険性はこんにちますます高まっている。現代においても戦争・武力衝突による強制的な移動は続いており、その影響は世界各地に広がる。将来的には宇宙空間をめぐる新たな戦争の可能性も指摘される中、戦争による移動の問題は過去に限らず、現在、そして未来への課題である。発表者らは、それぞれの事例にとどまらず、20 世紀までの戦争による移動を現在の時点で振り返ることの重要性、また、移動の記憶やトラウマを共有することの功罪について検討し、今後の研究への展望を示す。

（構成）趣旨説明／個別報告／まとめ／質疑応答

★ 若手実践企画⑤　「わたしがアーカイブを作るとき／使うとき：可能性・困難・権力を考える」

片平深雪（立命館大学大学院　院生）

松平けあき（東京外国語大学）

張唯（筑波大学大学院　院生）

水谷明子（津田塾大学）

わたしたちはそれぞれのオーラル・ヒストリーを実践する中で、「アーカイブス」にまつわる問いを意識してきた。例えば、聞き取り相手の高齢化に伴うアーカイブの必要性や、既存のアーカイブスを研究に活用する際の学術的手続きについてである。わたしたちは研究・調査の過程で、オーラル・ヒストリーとアーカイブスの関係は常に避けられない課題としてあるように感じている。

先行研究から学ぶ中で、こうした問いは、研究分野を横断しながら、繰り返し議論されていることがわかった。歴史学・社会学・政治学・文学・情報学など様々な分野を超えて、資料のアーカイブス化の必要性や重要性が指摘され、それぞれのオーラル・ヒストリーにも及んでいる。また最新の技術を駆使しながら、技術や倫理面を含めた手続きに関わる情報整理や議論が進められている。わたしたちは、アーカイブスの「重要性・可能性」が、それぞれの課題とどのように関わるのか、検討しようと考えた。オーラル・ヒストリーの研究過程で、アーカイブを実際に作ったり、使ったりしようとした場合の、「ささいな悩みやまごつき（単に、手続きの手間や経済的コストに還元されるようなものだけでなく）」を想定し、議論を通して、言語化し、共有した。更に、実際のミュージアムへの視察やヒアリング、あるいは既にアーカイブスについて考え実践している先人たちとの対話を通じて、オーラル・ヒストリーとアーカイブ化に関わる問いと「まごつき」を深化させる解決の糸口を掴もうとしてきた。本発表は、その中間的な考察をまとめたものとなる。

わたしたちはまず、『アーカイブを作るとしたら』『アーカイブを使うとしたら』の２つの問題意識に分けて問いを検討した。議論を通して、オーラル・ヒストリーのアーカイブスは、「語り手」だけが語っているも

のになるのだろうか、という新しい問いが上がってきた。オーラル・ヒストリーを記録する際に、そのオーラリティを引き出した聞き手の「気配」、その時・環境が伝わるような、それらの情報も含めて記録するアーカイブが重要であり、可能性を秘めているのではないだろうか。また、聞く側と語る側の記録として一緒にアーカイブを作る、語り手のアーカイブに聞く側が参加することによって、さらに記録が豊かになっていくのではないか、という指摘もあった。

一方で、アーカイブスを使う時に感じた「編集」の問題もある。誰がどのようにオーラル・ヒストリーを編集したのか。そもそも誰がアーカイブを作ることができるのか。アーカイブスの語源は、アルケイオン（古代ギリシャの支配者に属するもの、記録の保管庫）であり、「公文書」と訳される。アーカイブする側は、権力を持つものという歴史が長い。しかし、それに組せず、権力への抵抗をアーカイブとして示す、民衆・市民がアーカイブスをつくる、という流れもあると学んだ。

こうした議論を経て、現時点では以下のような発表を考えている。まず「『オーラル・ヒストリー』するひとたちの『オーラル・ヒストリー』」である。「『オーラル・ヒストリー』する」実践者がどのような背景で、そして時には偶然をきっかけとして聞き取りをはじめ、アーカイブ化を目指すようになったのか。研究者、市民活動家、アーティストなど多領域の実践者と対話することで、「重要性・可能性」や「まごつき」にまつわる複声性を掬いだす。次に、研究で自身が聞き取ったオーラル・ヒストリーと、他者が聞き取ったアーカイブ化されたオーラル・ヒストリーにはどのような関係性や違いがあるのか。先駆者から学び、違いを乗り越える視点の獲得を目指す。更に、オーラル・ヒストリーのアーカイブ化には、他のアーカイブにはないどのような特徴があるのか。オーラル・ヒストリーをアーカイブ化する過程についても考えたい。最後に、女性史や運動史、個人史、研究史など、オーラル・ヒストリーの方法がアーカイブ化を目指す史料群の特徴とどのように関わり、アーカイブ化の可能性を広げていけるのか、検討したい。

（構成）経緯・趣旨説明／個別報告（片平深雪「『オーラル・ヒストリー』するひとたちの『オーラル・ヒストリー』」、松平けあき「他者が聞き取ったオーラル・ヒストリーを、わたしはどのように聞くのか」、水谷明子「オーラル・ヒストリーのアーカイブ化による可能性と課題」、張唯「運動・裁判などのオーラル・ヒストリーをどのようにアーカイブ化できるのか」）／まとめ／質疑応答　　司会（張唯）

★　若手実践企画　まとめ
コメント　小林多寿子（一橋大学）／ 休憩 ／ 意見交換

Ⅱ．理事会報告

第 11 期 JOHA 臨時理事会　議事録

【日時】2025 年 2 月 20 日（土）18:00～　（オンライン開催）
【出席者】石川良子、佐藤量、根本雅也、李洪章、酒井朋子、清水亮、橋本みゆき、大門正克、小黒純、酒井順子、謝花直美、中尾知代（敬称略）
【議事録】酒井朋子

議事
（1）理事会の声明について
会員の自由な発言・活動を守り、誰もが安心して参加できる学会をつくるための JOHA 理事会声明文について検討し、ワーキンググループの草案が修正の上承認された。声明文は学会ホームページに掲載されること、また JOHA メーリングリストにおいては、第 22 回大会以後の経緯の説明とともに声明文を送付することが決定された。

以上

第 11 期　第５回 JOHA 理事会　議事録

【日時】2025 年 7 月 5 日（土）14：00～15:30

【出席者】石川良子、中尾知代（以上対面参加）

謝花直美、根本雅也、橋本みゆき、清水亮、大門正克、酒井順子、佐藤量、小黒純、酒井朋子、謝花直美、李洪章　（以上オンライン参加）

【議事録】清水亮

（1）会長挨拶

（2）各委員会からの審議・報告事項

○ 研究活動委員会

大門研活委員長より、6 月 21 日に神奈川県大和市で行われたワークショップ（歴史工房やまととの共催）の参加状況や当日の様子について報告された。企画した酒井順子理事からも、地元の人々が（調査対象ではなく）調査主体となってオーラル・ヒストリーを実践する可能性や困難について補足説明がなされた。

大阪大会について研活委員長より、大会報告申し込み状況について、個人報告２１件、共同１研、テーマセッション２件、若手実践企画 5 件（19 人）のエントリーがあったことが報告された。中尾理事より、大会初日の理事会のハイブリッド開催の要望がなされた。

○ 編集委員会

清水編集委員長より、７月２日に入稿が完了したジャーナル 21 号について、編集後記の原稿をもとに編集状況の報告がなされた。投稿本数の増加等による業務量を背景に、今期より導入された非理事編集委員増員制度の継続の要望がなされた。

○ 会計

会計（李理事）より会計報告として、決算案と予算案の説明が行われた。

HP の拡充予算については、事務局（佐藤理事）が見積もりを出して７月末時点で報告することとなった。

中尾理事から、過去の大会企画の一覧を、JOHA の HP の特定のページにまとめて掲載するアイデアが提示された。事務局の管轄として、引継ぎ事項に加えることとした。

○ 広報

・酒井朋子理事からニューズレターの編集について報告があり、打ち合わせがなされた。

・２月２０日の臨時理事会に関する簡単な報告をニューズレターに載せることが承認された。

・中尾理事から、臨時理事会のためのヒアリング記録と、声明の文書草案等の文書の引継ぎについて質問がなされ、検討事項となった。

○ 事務局

第 12 期 2025-2027 理事選挙結果について、選挙により次期理事 10 名が選出されたことが報告された。

○ 会長

倫理綱領策定に向けたワーキンググループ座長の佐々木てる氏が入室し、学会の倫理綱領の文案と、倫理委員会規定の文案についての報告と基本方針について説明した。
各理事から、いくつかの質問や文章表現についての提案がなされ、応答がなされた。具体的には、語尾の「しなければならない」という表現の強さや、学問分野の例示の文章のわかりにくさなどについての意見が、ワーキンググループに届けられた。そのうえで、ワーキンググループが若干の文章表現の校正を行い事後報告する前提で、両文案は承認された。石川会長が、次の総会で承認を得る予定であることを説明した。ここで佐々木氏は退出した。

○　その他
・蘭理事より、広告掲載確定した出版社についての現状の情報が、共有・確認された。
・石川会長から、2026 年度の大会は愛媛県松山市内での開催案が提示され、承認された。

以上

Ⅳ．シンポジウム・ワークショップ報告

１．2025 年 6 月 21 日 JOHA・歴史工房やまとワークショップ

市民による歴史研究サークル「歴史工房やまと」は、日本オーラル・ヒストリー学会研究活動委員会の応援を受けて、神奈川県大和市の厚木基地北側でフィールドワークを行ない、その後座談会を開催した。講師には長年大和市で平和運動に関わってきた久保博夫氏と平原久子氏を迎えた。JOHA からは石川良子会長と大門正克研究活動委員長ほか 3 人の参加があった。地元からの参加者は 22 人だった。その内訳は市民活動家、自治会関係者、元教員、歴史工房やまとのワークショップへのこれまでの参加者だった。

歴史工房やまと(History Workshop in Yamato)とは

「歴史工房やまと」は、市民が研究対象となるのではなく、自ら研究主体となって、神奈川県大和市を中心に聞き書き/オーラル・ヒストリーを実践することを目指して 2023 年 8 月に立ち上げた自主グループである。当初は、聞き書きにもオーラル・ヒストリーにも馴染みがない女性たちが中心だったが、地元の歴史を学び、インタビューの手法や調査倫理を学び、パイロットインタビューに参加しながら、自らの聞き書きの在り方を考えてきた。賛同者は一人ずつではあったが徐々に増えていった。この過程は『私たちはこのようにして歩き始めた』という手作り小冊子にまとめてみた。（小冊子ご希望の方は、rekishikoboyamato@gmail.com まで連絡ください)。2025 年度も引き続き、市民のライフストーリ―を聞いている。

ワークショップ「記憶の場を歩く　記憶の場を語る」

対象地域である神奈川県大和市は一見モダンな近郊都市だが、市内に海軍厚木飛行場を抱えている基地の街である。昭和 16 年から県央軍都計画の一部として飛行場が建設され、昭和 18 年からは台湾少年工 8400 人を擁する高座海軍工廠が建設された。戦局の悪化により、少年工たちは過酷な労働を強いられ、敗戦間際には 6 人の少年工が空襲で亡くなっている。基地の北側にはこの少年たちの慰霊碑と帰国後台湾で活躍した元少年工たちが寄贈したあずまや「台湾亭」がある。慰霊碑は、少年工たちへの加害の記念碑として語られ、あずまやは、少年工と地元民との民間交流を記念するモニュメントとして理解されてきた。

「記憶の場」とはフランスの社会学者ピエール・ノラが提唱した概念で、記憶を想起させる場所、モニュ

メント、記念碑、慰霊碑を指している。刊行物や資料も「記憶の領域」として理解される。「記憶の場」において想起される記憶は時と共に変化し、社会集団によって対立的に語られる。台湾少年工を想起する慰霊碑とあずまやは、片や日本軍による加害を想起させるものとして、そして他方のあずまやは地元の住民と少年工の交流を示すものとみなされている。そこには日本植民地主義への対立する視点が現われている。

加えてこの公園の北側には1964年にベトナムへの空爆が始まった時に起きた米軍機墜落によって亡くなった5人の住民への慰霊碑がある。当初は遺族を支援する会によって慰霊が行われていたが、事故後50年経った2015年に地元の平和団体が協力して木造の慰霊碑を建立した。厚木基地の北側公園はこうした過去の戦争と基地が招いた「暴力」の記憶の場となっている。だが驚くことに、多くの市民は台湾少年工の歴史も米軍機墜落の歴史も深く知ることはない。市の教育機関では平和教育が熱心に行われている一方で、地元の戦争記憶は住民にはあまり知られていない。滑走路の延長上の土地は万一に備えて国によって買収され、軍用機はあたかものどかな里山の上空を飛んでいると錯覚する。ワークショップ前に、刊行資料からわかる「記憶の場」の変遷と創られた自然の歴史を資料として参加者に配布した。

刊行資料を超えて体感するかつて生きていた個人の悲しみ

うつろいやすくて対立を招きやすい「記憶の場」は対立する集団のアイデンティティを形成する集合的記憶となってきた。しかし、集団的アイデンティティに分け入って個人の視点を見極める可能性がオーラル・ヒストリーにはあると思われる。久保博夫さんは、「平和をつくる大和市民の会」の主催者として、また革新系団体の連合を目指す「市民連合」のメンバーとして長年市内の平和運動に関わり、平原久子さんは生協運動や平和運動に関わってきた。モニュメントの案内は主に久保さんがおこなったが、平原さんの加害認識に鋭敏でなければならないという主張は久保さんの案内にも反映していた。基地の北側から滑走路を眺め、その延長線上にある相鉄線のトンネルは、「なぜ山でもないこんなところにこんなトンネルが？」という疑問を感じさせるが、実際に上から眺めると軍用機の落下から電車を守るという意図が分かるものだった。台湾亭での説明も少年工たちが機銃掃射で亡くなった場所が分かる解説だった。舘野鉄工所の跡地の慰霊碑を見学し、今は痕跡もない国有地にかつて軍用機が落ち、３人が亡くなった家族の悲しみがこもっていることを体感した。「記憶の場」という集合的アイデンティティは個々の人物の視点を通じてみることによってより具体的に、より個別の過去として、想起できる。

久保博夫氏と平原久子氏の講演と参加者の全員ディスカッション（１５時～１７時）

最初に久保博夫さんが公務員時代から市議会議員や県会議員、活動家、福祉関係者と交流していたこと、そして退職後約13年間、主として大和を中心に活動をしてきたことを話された。台湾少年工に関しては、市内小学校校長で『台湾少年工―望郷のハンマー』（1993）を著し、小学校やPTAで平和の語り部として活動した保坂治男さんから加害の歴史を聞いたこと、そして同時に1990年代後半から台湾少年工と大和市民の民間交流をめざした元市議会議長の石川公弘さんの活動にも言及した。また舘野鉄工所の慰霊碑建立については、それまでの支援者は主として東京在住だったが地元の団体の有志が集まって遺族を招き、50年慰霊祭を実施し、パンフレットを作製したことを話した。続いて平原久子さんが、1980年代前半から生協活動を通じて、映画『対馬丸』の上映、母と子の原爆展、平和行進、沖縄支援活動などに関わったことを話した。二人は互いに40年を超える理解者だった。

ディスカッションでは、久保さんに、慰霊碑建立にはたした市内平和団体の役割と個人の活動との関係が質問された。久保さんは、確かに市民活動で知り合った各団体のメンバーに声をかけたが、建立は個々の有志のつながりによって実現したのだと答え、平和活動には個人のつながりが重要であることを強調された。

また聞き書き活動の世代間継承についても参加者から指摘された。知ることは大事だが、オーラル・ヒストリーは平和の維持が危うい現在の状況下で喫緊の課題に応えることができるのかという問いだった。私た

ちは今若い世代に伝えなければならない、聞き書きはエネルギーにあふれた若い世代によってなされるべきであろうという声も聞かれた。学校では平和教育を受けてきたが、地元の歴史を知らなかったという声もあった、老人会サロンを運営している方から、地域の高齢者の経験を若い方々が聞いていく試みの可能性も指摘された。

歴史の記憶はモニュメントや刊行物によって固定化されうるものではなく、絶えず問い直しや語り直しが求められているのだろう。時代が大変なスピードで動いている中、聞き書き活動もより迅速に対応し、発信していかなければならないと感じたディスカッションであった。「歴史工房やまと」では、これからも地域の人々の経験を聞きながら、より立体的で力を持てる記憶を収集して発信していく努力を怠ってはならないと強く感じさせられたディスカッションであった。

「歴史工房やまと」のワークショップに参加され、問題提起をしてくださった方たちに心より感謝し、主体的な市民による聞き書きの可能性を探っていきたい。

（酒井順子）

Ｖ．お知らせ

１．国際オーラルヒストリー学会のお知らせ：近況報告

国際オーラル・ヒストリー学会は２年に一度、各国を回って行われます。今年はポーランドの古都、クラクフの大学を中心に開催されます。ポーランド・オーラル・ヒストリー学会と共催です。今年は、事前にＪＯＨＡで、国際担当理事の小黒純・中尾知代の担当で、準備セッションを３回行いました。幸い、申し込んだ方々は皆アクセプトされ、発表されます。元の共産圏や冷戦時代に東側だった国での開催は、チェコに続いて２か国目になります。今年で２３回目になる大会のテーマは Re-thinking Oral History　「オーラルヒストリーを考え直す」。９月１６日から１９日まで開催されます。１６日には３つの「テスティモニーとナラティブ」等のプレコングレスセミナーがあります。キーノートスピーチとして、「集団的トラウマの中における再記憶化と修復」などがあり、戦後８０年たって、トラウマが一つのキーワードになりつつあるのを感じます。その他のキーノートスピーチとディスカッションテーマには、「希望・態度・恐れに立ち向かうオーラルヒストリー」「オーラルヒストリーと気候温暖化」「オーラルヒストリーとコミュニティ・アーカイブ」があります。全世界からオーラル・ヒストリーを実践し、オーラル・ヒストリーを愛する人々が集まり、交流する機会はとても刺激的で、楽しいものです。

４日間にわたる学会の様子は、また、帰国したら、ご報告いたします。

（国際担当理事　中尾知代・小黒純）

2.　会員異動（2025 年 2 月 1 日～2025 年 7 月 31 日）

新入会員（入会順）

1.　武輪　敬心　　大阪歯科大学医療保健学部
2.　大池真知子　　広島大学・教員
3.　春日由紀夫　　駒ヶ根市立東伊那公民館館長

4.　宮崎嵩啓　　岩手大学教育学部・講師
5.　志岐和紀　　和歌山大学大学院観光学研究科博士課程後期・学生
6.　金成洙　　京都大学・学生
7.　小南光　　帯広畜産大学学生
8.　姜永根（カンヨングン）企業経営者
9.　茶園梨加　　宮崎公立大学
10.　岡野翔太（葉翔太）　神戸大学人文学研究科・助教
11.　杉本 雄一郎　　社会福祉士
12.　大森貴弘　　横浜市立大学大学院都市社会文化研究科
13.　土橋大記　　ＮＨＫ沖縄放送局・アナウンサー
14.　ビヤンビラ キララ　東京大学大学院総合文化研究科 博士課程
15.　太田真実　　大阪大学国際機構国際教育交流センター・特任助教
16.　坪田＝中西美貴　　成蹊大学・非常勤講師
17.　松原かおり　　日本文理大学工学部情報メディア学科・准教授
18.　森田良成　　桃山学院大学
19.　松川恭子　　甲南大学文学部・教授
20.　敖夢玲（あお・まんりん）　大阪大学レーザー科学研究所・特任研究員
21.　杉本雄一郎　　東京社会福祉士会／社会福祉士

退会者
藤喜一樹、荻原まき、仁井テリー、湯川真樹江、横家純一、渋谷由紀
※連絡先（住所・電話番号・E-mail アドレス）を変更された場合は事務局までご連絡ください。

（事務局 佐藤量・根本雅也）

３．2025 年度（2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日）会費納入のお願い

平素は学会運営へのご協力、まことにありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金のほどよろしくお願いいたします。

会費のご納入につきましては、9 月末日までにお願いしたく存じます。学会誌の一斉発送の時期を過ぎますと、ご納入確認がとれた後に、個別に学会誌発送手続きをとらせていただくことになり、事務局の作業負担の増大につながります。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

また、一部ですが、2024 年度・2023 年度分についても未納の会員がいらっしゃいます。こちらも早めの入金をよろしくお願いいたします。

なお、所属機関名義で振り込まれる場合は、別途、会計宛に入金した旨を会計にご連絡ください。（どの会員からの振り込みなのか確認できないケースが相次いでいます。ご注意ください。）

■ 年会費
一般会員：6000 円　学生・その他会員：3000 円
＊「学生・その他会員」の「その他」には、年収 200 万円以下の方が該当します。区分を変更される場合は、

会費納入時に振込票にその旨明記してください。（住所・所属の変更、退会の申し出などの連絡は、振込票ではなく事務局にメールでお願いいたします。）
＊年会費には学会誌代が含まれています。

■　ゆうちょ銀行からの振込先
口座名：日本オーラル・ヒストリー学会
口座番号：00150-6-353335
＊払込取扱票（ゆうちょ銀行の青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。
＊従来と記号・番号は変わりありません。

■　ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報
銀行名：ゆうちょ銀行
金融機関コード：9900
店名：〇一九（ゼロイチキュウ）
店番：019
預金種目：当座
口座番号：0353335
カナ氏名（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便振込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて個別に領収書も発行させていただきますので、その際はご連絡ください。
その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の李（leehj(at)css.kobegakuin.ac.jp）までお問い合わせください。

（会計　李洪章）

・・・